

全校の皆さん、おはようございます。

期末考查が終わり、いよいよ西高祭に向けて慌ただしくなってきました。気持ちも気温も熱(暑)くなってきましたので、夏バテを起こさないようにしたいものです。

試験や行事、クラブの大会など、自分にとっての一大事が近づいてくると、どうしても気持ちが焦ってくるものです。理想を追い求める気持ちばかりが先走ってしまつて「あれもこれも」という思いに心が支配されてしまいます。どれだけ入念に準備をしても「見落としていることはないか」「間違いはないか」と、いつまでも不安な気持ちが拭い去れないこともあります。旅行に行くときもそうですが、「忘れ物はないか」とか「もしかしたらこれも必要になるかもしれない」と完璧を求めて支度をしていると、いつの間にか鞆が荷物でいっぱいになって結局自分を苦しめる、ということもよくあります。

自分なりの理想や完璧を求めて努力したり準備したりすることは大事なこともかもしれません。科学や社会など文明の進歩は、そういった人間の努力によつて実現したものと言えます。しかし、仏教を通して考えてみると、理想や完璧を追い求めることを正しいこととして突き進むというのは実は危ういことである、ということが分かってきます。

まず、人間が思い描いている理想というものが本当に正しいものなのかどうか、という問題があります。それぞれの理想がいくら立派なものであつても、人によつて理想は違いますから、頑なに理想を握りしめたままだと、どうしてもぶつかり合いが起きます。漫画『ドラえもん』には「どっちも、自分が正しいと思つてるよ。戦争なんてそんなもんだよ」という有名なセリフがあります。また、宗教家でありインド独立の父と呼ばれるマハトマ・ガンジーは「握りこぶしでは、握手はできない」と言いました。「理想」や「正しさ」を握りしめる拳は、相手を傷つけてでも自分を押し通そうとする凶器にもなってしまうものです。

「正しさ」や「理想」など人によつて違うものが、果たして人間を本当に支える拠り所となるのか。親鸞聖人はそのように考えた人でした。そして、自分が頑なに握りしめていた「正しさ」や「理想」を「諦めて」、そこから美しく手を離し、自分で自分を受けとめていける人になったのでした。一般的に「諦める」というのは物事から目を背けるネガティブな言葉として使われますが、仏教では「真実をあきらかに見る」という仏教の核心を表す言葉です。親鸞聖人は教えに触れて自分を「諦めた」ところから、本当の自分を生きる確かな第一歩がスタートしたのです。